山 形 大 学 紀 要（教育科学）第17巻 第４号 令和３年２月
Bull. of Yamagata Univ., Educ. Sci., Vol. 17 No. 4, February 2021

図工・美術への苦手意識をなくす教育方法の研究
―教員養成課程における実践的研究の成果―

降籏　　孝
地域教育文化学部
（令和２年９月30日受理）

要　　旨

小学校教員養成課程においては、実態調査結果から約６割の学生に大なり小なり図工・美術に対して苦手意識があることが明らかになっていた。苦手意識については個人の特性の１つとして軽視されがちであるが、教員養成の立場からは、子供達に図画工作を教える教育にも影響を与え、教師の苦手意識は無視できない重要課題と考えた。

本研究の目的は、図画工作・美術への苦手意識をなくす具体的な教育方法を明らかにすることにある。実態調査の結果の分析から苦手意識を生み出す原因を追及し、苦手意識を解消させる要素を明らかにしてきた。その要素をもとに一番苦手意識があった大学生を対象に苦手意識を減少させる試みを大学講義において検証してきた。平成31年（令和元年）度における講義前と講義後に調査し、大学生の苦手意識の変容とその理由とを考察することで、小学校教員養成課程における図画工作・美術への苦手意識をなくす効果的な教育方法を明らかにした。教師の苦手意識を払拭することで児童の苦手にも実践的に対応できると考えた。

キーワード：図画工作、美術、苦手意識、教育方法、小学校教員養成課程

１　はじめに　　主題設定の理由と研究の目的

現在の小学校における図画工作科教育そして、中学校における美術科教育の義務教育段階の学校教育において、かなり昔から無視できない重要な課題があると考えている。それは、児童・生徒が抱いている図工・美術に対する苦手意識の問題である。

好き嫌いの思考や得意・不得意や苦手意識については、様々な分野においても個人の特性の一部であり、その存在は当たり前で問題視してもしょうがないという傾向がある。それ故に、小学生や中学生の子どもだけでなく大人になっても図工・美術に対する苦手意識を抱いている人間は少なくない。大学で、教員養成の必修科目を担当しながら実際に学生に話を聞いたり、アンケートによる実態調査をしてみると、同じように図工・美術への苦手意識を抱いている者がかなりいることがわかってきた。中学校・高等学校の美術教師を目指す美術科の学生には、その傾向は少ないが、特に小学校教員や幼稚園教諭・保育士を目指す学生の中には、図工・美術への苦手意識を持つ学生が少なくない。

図工・美術の教育において大事にすべき目標は、児童・生徒が大人になってプロの芸術

家やアーティストになるための技術指導や養成教育ではない。義務教育における造形美術表現においては、子供たちの技術的な差異はあっても児童・生徒の一人一人の思いや願いを大切にし、それを試行錯誤しながら表現として具現化させる所に教育的意義が存在する。故に、児童・生徒の一人一人の思いや願いを学習前の段階でスポイルしてしまうような苦手意識や不得意観のような精神的なマイナス要因は極力なくすべきであり、教育によって絶対につくりだしてはならないと考えている。

本研究の目的は、子ども達に苦手意識をつくらせないために小学校教師を目指す学生の図工・美術に対する苦手意識をなくす具体的な教育方法を明らかにすることにある。

2　図画工作・美術教育の現状と課題

⑴　図工・美術に対する〔意欲〕について

研究の第１段階として、図画工作・美術における〔意欲〕と〔苦手意識〕について実態調査を実施してきた。[1] 調査対象は、４年生以上の小学生271名の児童、２校の中学生全クラス988名の生徒、２校の県立高校の芸術科目（美術）を選択した216名の高校生、そして大学にて教職科目を受講する４クラス合計131名の大学生に実施することができた。全調査数は、1608名である。調査を実施し終えて、全てを対象とする義務教育段階と芸術科目の１つとして美術を選択してきた高校生とは、実質的に比較対象に成り得ないと判断し、今回は調査考察対象から高校生については除外して考察した。

調査結果から、右の図１のように小学生から大学生まで図画工作や美術に対しての〔意欲〕については、小学４年生の８割を最高に中学２年生でも６割以上の児童・生徒は、概ね意欲的に取り組んでいることがわかった。また教科としての好き嫌いという認識の多少の違いはあっても、図画工作や美術に対して意欲をもって臨んでいることもわかった。

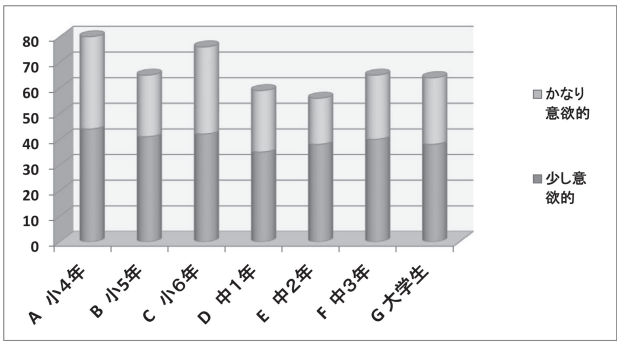

図１　図工・美術への意欲：縦軸％

学習に対する意欲の重要性については、図画工作・美術に限らず学習活動全体にかかわり、その教育成果を大きく左右する程重要な位置を占めている。

「学習意欲の有無、その状態がどのようなものとして学習の場において持続していくものであるかは、学習活動の出発点として重要であるだけでなく、学習活動の全体、さらにそこで獲得していく学習内容の質、学習者の成就感をも左右していく重い意味をもっている。」[2]

これは全ての教科に通じて言えることであろう。さらに、この意欲は、学習に向かう姿勢の前向きな側面だけでなく、豊かな表現の根本である内面の発露の部分にも大きく関わるので、その重要性は他の教科の比ではないだろう。それだけ児童・生徒の図画工作・美

術への〔意欲〕は重要事項と言える。

図画工作や美術に対してあまり意欲を持って取り組めない児童・生徒の存在もあり、それは造形美術教育をより良くするためには無視できない現状である。

なぜ、意欲が出ないかの理由を調べると、苦手意識があることや人と比べて劣等感を抱いてしまっているケースが多いことがわかった。「意欲がない」と応えた児童･生徒の理由を調べるとほぼ100％なんらかの苦手意識を抱いていることがわかった。このことからも意欲と苦手意識とは、かなりの相関関係にあるといえる。

図画工作・美術教育をより良くするために意欲を高めることも大事であるが、それより前に苦手意識が生まれる原因を追及し、それをなくすような学習空間があって、初めて意欲を高めることができるものと考える。

⑵　図工・美術に対する〔苦手意識〕について

苦手意識については、図２の調査結果から、小学生段階では２割未満で苦手意識は少ないが、中学生になると一気にそれが５割近くに増加するということ。それが、大学生になるとさらに増加して６割近くになることがわかってきた。

児童・生徒の苦手意識は、どのような理由から生まれてくるのであろうか。苦手意識がないと応えた児童･生徒の理由から、「好きだから」を理由にした児童は、小学生３学年で47名、中学生３学年で28名いた。次に、「楽しいから、面白いから」を理由にした小学生は46名、中学生は24名いた。このことから、苦手意識がない児童・生徒は、好きで楽しく面白いという経験を実感し、そこから肯定的な意識を持っていることがわかる。

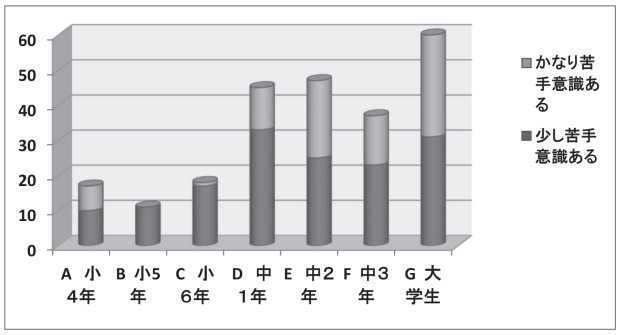

図２　図工・美術に対する苦手意識：縦軸％

逆に、苦手意識があると応えた児童・生徒の理由については、圧倒的に多いのが「下手だから、うまくできないから」と書いた小学生は21名、中学生は50名いた。それも、絵を描くことに限定していて「絵が下手で、絵の自信がないから」と理由を書く児童も多い。ここに、苦手意識を抱く児童・生徒は、うまくできないことや下手であると意識していることが主な理由になっていることがわかる。

それに対して、図画工作がとても好きでかなり意欲的、そして苦手意識が全くない小学４年生の10歳男児は、苦手意識がない理由として、「なんでもやってやろうと思うから、そのけっかおもしろい事ができるから。」とその理由を書いていた。また別の10歳男児は、「ぼくは、絵がへたとかうまいとかは、あまり関係ないと思うし、その工作に思いをこめていれば、ぼくはいいと思うから。」と書いている。

このように苦手意識を抱いている子どもの意識と抱いていない子どもの意識との根本的な相違がある。さらに苦手意識が生じる原因には、当事者自身の問題だけではないことも

注目する必要がある。理由の中には、「人と比べてしまうから」とか「人から笑われるから」というものがあった。ここに、人と人との関係の中で苦手意識を生み出してしまう状況があって、それが苦手意識を助長してしまうことに着目したい。意欲と苦手意識は、集団としての人的環境も重要な要因といえるかもしれない。

田上不二夫は、人と人との集まりである集団と「やる気」との関連性について

「仲間や集団の中で自分がどのように生きるかというイメージが、人間関係や集団活動での『やる気』に影響する。学級で『群れ』の経験をする重要性が増しているように思う。」[3)]

学級における集団は『群れ』をなし、学習空間を形成している。一人一人の『やる気』を引き出し、逆に苦手意識を植え付けさせ意欲を喪失させる重要な要因と言える。

3　苦手意識を解消させる試みと検証

⑴　実際の授業による苦手意識解消の試み

実態調査の結果から、一番苦手意識の割合が高かった小学校教員養成課程の大学生を対象に、実際の講義を通して苦手意識を解消するための様々な試みを現在まで継続的に行って検証してきた。

講義に取り入れてきた様々な試みの実際の効果を確認するために、講義の授業前と授業後に調査を行い苦手意識の変容を調べてきた。そこでは、変容だけではなく変容をもたらした原因についても自由記述させた。平成28年度からは、変容をもたらした理由について順位をつけて記述してもらうことで、変容させた理由の影響度について数値化することができた。平成31年（令和元年）度においても理由と原因の数値化によって、本研究の最終目標である有効な教育方法をも明らかにすることができた。

苦手意識の変容の調査結果では、平成27年度には苦手意識が増えた学生は１人もいなかったが、平成28年度には苦手意識が少し増えたという学生が２名いた。その理由についてその中の１人は、次のように書いている。

「上手な作品を作るなら上手だと思った人の表現の仕方を真似して取り入れれば良いが、自分らしいを表現するとなるとまっさらな状態から何かを生み出さなければならないので難しいと思ってしまった。」[4)]

これは、とても貴重かつ重要な感想であると考えた。授業で一貫して強調してきた上手な作品ではなく自分らしい作品を求めるとなると、表現そのものの根本的ともいえる重要な壁にぶつかることになる。この表現という壁にぶつかり自分自身と対峙し試行錯誤しながら、苦労して工夫してそれを乗り越える所に、自分らしい表現がある。

実際に講義を通じて教育によって、学生の抱いていた苦手意識そのものを大幅に減少させることはできたが、逆に表現という新たな課題が生まれて別の意味での苦手意識が生じてしまうことも確認することができた。新たな研究課題として明らかになった。

授業後の調査では、苦手意識の変容と共に、それをもたらすのに影響があった原因についてきいている。影響があったと思われる順に順位をつけ１番影響があった１位から５位までの順で自由記述してもらった。１位を５ポイント、５位を１ポイントで数値化する。

原因で１番多かったのが「自分らしい表現を目指すことが大切だとわかったから」だっ

た。37名が第１位に影響があった原因としてあげており、第２位も22名いた。合計279ポイントで１番多かった。次に影響があったと思われる原因は、「上手下手で評価するのではないことがわかったから」だった。第１位は28名で合計140ポイントであった。自分らしい表現を目指すことと共に上手・下手で評価しないことをセットで強調し指導することの重要性が明らかになった。総ポイント数で２番目に高かったのは鑑賞活動に関するものであった。「鑑賞活動で自分らしい表現の良さを発見したから」であり、影響のあった順位としては３位以降に多く上げられていた。合計142ポイントであった。このことから図工･美術では、表現ばかりでなく鑑賞活動も併行して重視する必要性を実感することができた。

次に、この調査結果の分析から苦手意識を減少させる要素を明らかにしてきた。

4　苦手意識を抱かせない要素

授業前後での調査から苦手意識の変容をもたらした理由を深く考察することで、苦手意識を減少させることのできる要素のいくつかを明らかにすることができた。[5)]

⑴　上手・下手の呪縛から解放させること - 要素①

苦手意識を減少させる要素の１つには、今までの経験から作り上げられた教科観や教科のイメージの確認が前提となる。それは苦手意識が減少した理由で多かったのが「上手下手で評価されることがなかったから」であった。ここに学生達は上手・下手に精神的に強く縛れていたことがわかる。図工・美術は、芸術家やアーティストなどのプロ作家を目指すような一部子のための教科ではない。Hリードは、著書にて強調している。

「われわれはもはや、ごく少数の子どもを、芸術的素質といわれてきたものを尺度にして、選り抜いて、この少数者を芸術家となるように教育はしない。」[6)]

教えるべき子どもの意識の中に上手に図工・美術は作品をつくらなければならないという価値観があれば、抜本的に意識改革させる必要があるといえる。美術教育界に影響を与えてきたローエンフェルドも子どもの絵に写実的なつりあいが重要な要素であるかどうかを決めるのは、教師ではなく唯一子ども自身であるとし、次のように述べている。

「表現形式を押しつけられると、子どもは抑圧され、子どもの創造力、子どもの芸術活動、ひいては個性までしぼんでしまいます。」[7)]

要素の第一は、うまく上手に描き作らねばならないという精神的な呪縛から子どもを解放させて、子供たちの自由な表現を可能にすることであると言える。

⑵　うまさより自分の表現を目指すこと - 要素②

次に苦手意識を減少させることができた原因で１番多かったのは「自分らしい表現をめざすことが大切であるとわかったから」であった。うまく上手な作品を目指さないのであれば一体何を目指すのか、それが自分らしい表現を追究することであり、個性や独創性の育成にも繋がる重要な要素でもある。

これは図工・美術の教科における大切な目標でもある。教科の目標は、作品を上手につくることよりも一人一人の思いやイメージをもとに、自分らしい表現を目指すことであり、それを重視することが求められる。当然、評価についても表面的にうまく上手にでき

たかどうかではなく、自分らしい自分だけの表現をいかに試行錯誤しながら工夫して取り組んだのかが問われることになる。評価については、上手・下手で比較する見方から一人一人の表現のよさと工夫とを見つけ合い認め合うことが重要になってくる。

⑶　表現を可能にする用具の知識・技能 - 要素③

苦手意識が減少させることができた理由の一つに、「水彩絵の具の使い方を知ることができたから」「クレヨン･パスの可能性を知ったから」など、用具に関するものを理由にあげている学生も少なくなかった。また「パレットの使い方を初めて教わった」とか「混色の仕方を学んだ」という感想もあり、この用具に関する基礎的な知識や技能なくして、苦手意識を解消することなど不可能であると考えた。第１の要素と第２の要素と共に、それを実現することを手助けする用具の基礎的な知識とその技能は、苦手意識を生じさせないための不可欠な要素といえる。

⑷　表現本来の楽しさを味わわせること - 要素④

苦手意識が減少した理由の記述の中に「表現の楽しさを味わうことができたから」があった。これは、今までの経験の中で表現を本当に楽しめなかったことをも裏付けている。

とかく絵画表現では、写実的に眼に見えるように再現できることが価値の高いものとして捉えられてきた歴史がある。現在でもその傾向は根強く残っているようだ。

「芸術の表現というものが、単なる自然の再現ではない、造形としてのおもしろみを発揮すべきものであることを、身を以て体験せしめるように導くことである。子供の図画教育が、単なる絵を描く技能の習得であるとされた時代は過ぎた。」[8)]

表現は自然を見たとおりに再現させることではなく、表現そのものの楽しさを味合わせることが重要となる。

⑸　自分らしい表現が認められる学習空間 - 要素⑤

苦手意識が減少した理由の中で特に注目するのは、「グループの仲間から、上手でなくて〇〇らしく自分らしさが出ていると褒めてもらったから」「友だちから認めてもらったから」という記述を何名かの学生がしていた。表現はそもそも個人的な営みではあるが、個人の内面的なものが表に表れたものでもあり、それを受容する第２の存在がいるかいないかでは大きな相違が生じると考えられる。

「子どもたちの意欲を支え、育てるものは、ただ１つ描いた絵がだれかに受けとめられるということである。教師が、あるいは親が、その絵に共感し、受容し、そして感動してやることが、子どもたちに描きがいを実感させ、新たな意欲を燃え立たせるのである。」[9)]

調査結果から発達段階の年齢があがるにしたがいグループ内の他者からの評価や褒め言葉が、かなり影響があることがわかった。一人一人の良さを認め合い褒め合えるような学習環境が重要である。これはグループだけでなくクラス全体としてお互いに表現を認め合える温かな学習空間の在り方が、造形美術教育おいては特に求められる。

「ここでいう学習空間とは、児童･生徒や教師によって意図的･無意識的に形成されている教育規範･価値観をさしており、評価を含めた造形美術教育のあり様を大きく左右し、その結果、大きな教育格差を生み出すことになっていると考えている。」[10)]

この学習空間は、教えるべき内容を第１の要素、それを教える指導方法を第２の要素とすれば、学習空間の質は第３の要素といえるほど重要である。鈎治雄は、潜在的なカリキュラムの視点から学習空間が子どもたちに与える影響の大きさを述べている。

「公的なカリキュラムの枠を越えた人間関係や集団の雰囲気、規範への適応をとおして、子どもたちが学習し、獲得する価値観や態度といったものは、ある意味では教育課程において企画され準備された内容や教材以上にはるかに大きな影響を持ち得ることが予想させる。」[11)]

苦手意識を生み出さない目指すべき造形美術教育を実現するためには、この学習空間の質に着目し、それをより良くすることが重要な要素の１つであると考える。

5　苦手意識をつくらせない教育方法の実証研究

前述した苦手意識を減少させる５つの要素をもとに、その内容としての教育コンテンツを模索しながら、実際の大学講義の中で具体的な教育方法として取り入れて検証してきた。そこから苦手意識をつくらせない具体的な教育方法を明らかにしてきた。

⑴　教育方法① ― 学生の実態・現状の把握（教科イメージと経験の確認）

教育方法の第１としては、授業を実施する前段階として、最初にまず学生の実態把握の必要がある。学生がどのような図工・美術に関する学習経験を積み、どのような教科イメージを持っているのか生徒のレディネスを事前に把握することが必要と考えた。

学生の実態把握については、４月最初の第１回目講義において講義のガイダンス時に、実態調査アンケートの実施をもって毎年把握してきた。

「苦手意識を減少させるためには、今まで抱いていた『うまく上手に作品をつくらねばならない』という固定概念や価値観を変容させることが重要な要素の１つと考えた。」[12)]

これを確認することが、要素①で問題にしていた「上手に作品をつくらねばならない」という呪縛状態にあるのか、ないのかを客観的に判断し把握することができる。

平成31年（令和元年）度における学生の実態について考察する。４月初旬の第１回目の最初の講義で行った実態調査の結果は、図工・美術に対しての意識である好き嫌いの結果は、とても好きだと応えた学生が９％、まあまあ好きという43％の学生を合わせると52％がこの教科に好意を示していた。逆に、かなり嫌いという学生は４％いて、少し嫌いという17％と合わせると21％は嫌いという否定的な意識を持っていたことがわかった。多少の増減はあるにしても毎年大体このような傾向があることは変わっていない。

教科に対する好き嫌いの意識だけでなく、教科の学習に向かう意欲についても調査している。それは、附属学校園との共同研究において造形美術表現に取り組む子ども達の意欲について研究したことがあった。その時に附属学校の教師の方から子ども達の学習にむかう意欲と抱いている苦手意識と因果関係があるのではないかと実体験から言われたことがきっかけになっている。それ以来、４月当初の調査項目の中に、教科に対する好き嫌いと共に学習に取り組む意欲についても調査してきている。図工と美術に対する学習意欲にいての調査結果は、かなり意欲的に取り組んだ学生は12％で、少し意欲的に取り組ん49％の学生が比較的意欲的に図工・美術に取り組んでいたことがわかる。反対にかなり意欲のな

かった学生が４％少し意欲ない12％を合わせると16％の学生は図工・美術の教科学習に対して意欲がなかったことがわかった。これはほぼ教科に対する好き嫌いの嗜好度合いに比例していることがわかる。

次に本研究テーマに最も関連し注目すべき図工・美術への苦手意識についてである。図３のグラフが、４月当初大学生が抱いていた苦手意識の実態結果である。

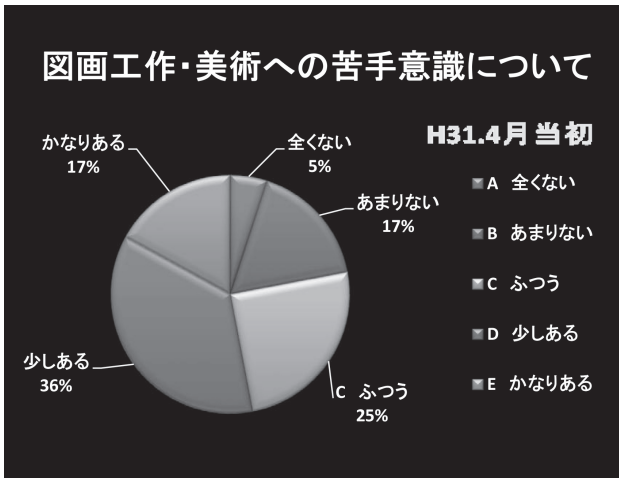

図３　４月当初の苦手意識の現状

苦手意識が全くなかった学生が５％、あまりなかった学生の17％を合わせると22％の学生には、苦手意識がなかった。反対に、かなり苦手意識がある学生は17％で、少しある学生は36％であり合わせる地と53％の約半分以上の学生に大なり小なり苦手意識があることがわかった。

この結果は、好き嫌いや意欲に関する結果よりもはるかに苦手意識の割合が高いことがわかる。図工・美術に対して好きで意欲のある学生でも苦手意識があったこともあらためて明らかになった。この実態調査の結果は、本研究の大きな主要動機になっている。さらに、この状況は今に限ったことではなく実態調査を始めた20年前から変わらない結果と傾向になっている。この４月当初の多くの学生たちが抱いていた苦手意識が、前期「図画工作の基礎」そして後期「教育実践図画工作」の講義を受けて、この苦手意識がどのように変容していくのか、重要な研究視点となった。さらに、その変容を導いた原因と理由とを考察することによって、苦手をつくらない教育方法が明らかになると考えた。

教育方法の第１は、前提として現状と実態の客観的把握があげられる。

⑵　教育方法② ― 教科の目的の明確化（作品作り教科観からの脱却）

教育方法の第２としては、図工・美術教育の目的を明らかにし、学生の抱いている教科イメージをより良くする必要がある。それは、実態調査の結果から学生の抱いている教科イメージには、大きな格差があることがわかっている。学生の中には、図工・美術教育の目的はうまく上手な作品を描き作ることであるという意識がかなり強固に持っている者もいる。これらの学生は、図工・美術への苦手意識も少なくない。

そこで、本来の教科の目的を明確にするために学習指導要領についての解説等を行ってきた。図工・美術の教科は、単に作品作りが目的ではないこと、児童・生徒の表現過程にこそ教育的意義があることを授業でふれて理解させる必要がある。

さらにこれに関連して、図画工作の教科書についても講義で扱ってきた。教科書を目指すべき作品例が載っているお手本という見方をしている学生も少なくない。実際に、現在学校現場で使用している図画工作の教科書を提示し、学生には直接見てもらいながら、図

画工作教育で目指すことについて考えさせ、理解してもらう内容を盛り込むことが重要となる。児童･生徒の時には、無意識に見ていた教科書の存在が教師の視点での存在となり、ここから教科書認識も質的に変わることになった。

「教科書は、あくまで真理・真実にもとづいた内容であること、子どもにとって楽しく、感動のわく教材が盛り込まれ、豊かな情操と確かな学力が身につくように構成されていること。」[13)]

教科書については、教えるべき内容と言うより楽しく感動がわく教材の提案である。

⑶　教育方法③ － 教科書を通して図画工作・美術教育の意義と歴史の理解

教育方法②では、教科の目的を明確化させるために現在学校現場で使われている教科書を参照させてきたが、併用して我が国の古い教科書を重要な資料として活用することで、我が国の美術教育の歴史を辿ることができる。そして教育の意義について考察する。

我が国の図画教育における古い教科書として、明治時代後半から大正時代、そして昭和時代の初期まで３時代を通して長期にわたって使われた国定教科書の「新定画帖」、そして昭和初期から使われた「小学図画」などの教科書を実際に学生たちに示しながら、我が国の学校制度が始まった明治５年の学制スタートから現在に至るまでの図画工作・美術教育の歴史の概要を解説して、その経緯を理解させると共に、前述した教育法②の教科のねらいや目的、つまり教育の意義についての理解へも繋げることが可能になる。

⑷　教育方法④ － 材料体験からの題材研究（表現活動の魅力を体験）

教育方法の第４としては、やはり実際に表現活動を行う題材研究がある。ここでは、第４の要素にあったように、表現の楽しさを体験してもらうことが重要と考えてきた。

平成31年（令和元年）度の講義では、前期と後期の講義において７つの題材とそれに関する11の表現活動を本題材に取り組む前の学習経験として意図的に実施してきた。

○　低学年題材　「新聞でへんし～ん」　身近な材料を活用して

・表現活動①「しんぶんビリビリ」　材料体験を位置づける

低学年対象の新聞紙の身辺材を使った題材研究に取り組んだ。最初から作品づくりに臨むのではなく、最初にちぎったり、まるめたり、筒にしたりという材料体験を十分させる。

これが、表現活動①の「しんぶんビリビリ」活動である。新聞紙という材料に十分触れせる経験となる。作品づくりでない材料体験が重要となった。その十分な材料体験の後に、低学年対象題材の「しんぶんで変身」の題材研究を実施した。この活動後は、いっきに講義における学習の雰囲気が良くなるのがわかる。造形表現活動の魅力でもある。

○　中学年題材　「粘土であらわそう」　可塑性材料を活用して

・表現活動②「粘土ゲーム」ⅠⅡⅢ　**・表現活動**③「マイ粘土ベラをつくろう」

中学年対象の粘土を使った立体表現の題材研究に取り組んできた。粘土の種類や特性についての解説も講義に入れる。そして最初から作品作りに入るのでなく、最初に粘土あそびのゲーム的要素を材料表現体験に取り入れて十分に粘土材料になじませてきた。

粘土ゲームⅠは、１分間で粘土をより長くするというゲームである。学生たちは、短い時間で夢中になって、粘土を長くしようと取り組むことができた。粘土ゲームⅡは、同じ１分間でまん丸な真球を作るというゲームである。粘土を長くする活動から塊としての球

を作る活動に移行するのである。粘土ゲームⅢは、１分間でピラミッドを作るというゲームである。一般的にピラミッドは三角形というイメージがあり三角錐に思いがちであるが、立体としては正四角錐である。ゲームの要素に教養的な要素も入れることで、新たな気づきや発見をも含まれた豊かな学習経験とすることができる。

それらの学習経験を生かして最終的に粘土を使った立体表現題材を学生自身に考えさせる。令和元年度には、題材として「不思議な宇宙人」「面白生き物」「住んでみたいおうち」「未来のまち」など様々なアイディアが学生の方から出てきた。それを各クラスともグループ単位で選択して表現に取り組んだ。１つの題材に取り組ませることもできるが、選択制にすることで、複数の題材の可能性を理解することができる。立体表現の粘土を使った題材では、粘土の可塑性を生かして様々な題材を設定し取り組むことができる。

図画工作における題材としては、低学年向きの粘土に親しみ楽しむことを優先した題材設定にする。中学年では、粘土の様々な可塑性を生かしながら児童が作りたいものを表現させることができる。高学年では、それまでの経験を生かして、より高度な表現課題に取り組むことが可能になる。発達段階に応じて題材の内容も吟味することができる。

この粘土題材では、関連した学習経験として自分の粘土ベラを自分自身で作る。「マイ粘土ベラを作ろう」の学習経験も取り入れている。材料は、木材ではあるが、比較的柔らかくて加工のしやすい割り箸を材料にする。それを、簡単な切り出し類に該当する身近なカッターナイフを使って削って、自分だけの粘土用ベラを作るのである。この学習経験を通して普段あまり使わない刃物道具であるカッターナイフの扱いに慣れてもらうことと指導の際の留意事項を理解してもらうという教育的意味も込められている。

○　低・中学年題材　特別講義「クレヨンであそぼう」（クレヨン画材の可能性）

・**表現活動④**クレヨンでいろいろ（クレヨンによる多様な表現活動）

身近な絵画表現用の用具としてクレヨン、パス、クーピーなどがある。世界的に有名な画材メーカの「ぺんてる」東京本社から特別講師を招いて年１回特別授業を行っている。毎回、学生たちにも好評なので、最初は「ぺんてる」からの依頼でスタートした特別講義であったが、現在では継続実施を依頼している。

特別講義の内容であるが、最初に自己紹介をした後に、画材としてのクレヨン、パス、クーピー等の相違について、製品材料の違いとその用途について説明してもらっている。実際に学習シートを使いながら透明プラスチックシートやガラスにも描けるクレヨンの特殊性やそれをティッシュなどで容易に消せる特性なども理解することになる。

・**表現活動⑤**「みんなで連画」４人ないし５人のグループで、１枚の画用紙にテーマを決めてクレヨンで絵を描く。３分たった所で右回りに画用紙を渡して次の人に続き描いてもらうのである。１周回った所で、協同で作り上げた作品が出来上がるのである。

・**表現活動⑥**「不思議な見えない魚たち」（クレヨンとコンテによる表現）

白いクレヨンで描いた見えない不思議な魚たちが、魔法のコンテの粉をふりかけると、あら不思議、みるみる目の前に現れ歓声が上がる瞬間でもある。

・**表現活動⑦**「みんなでカラフル迷路」（クレヨンによる共同制作活動）

大きな透明シートにみんなでそれぞれの線が重ならないように迷路を描く。それをクラス全体に工夫して紹介する。今までの講義でも当然題材研究を講義の内容に取り入れてきたが、苦手意識を減少させるためには、やり方を工夫する必要があると考えていた。

単純に、作品例を示して取り組みさせるだけでは、得意な学生はすぐに表現に取り組みできて良いが、そうでない学生にとっては、なかなか表現に取り組むことができずにいた。これでは、益々図工への苦手意識を助長させる危険性をはらんでいる。

教育方法④として、最初に作品例を見せるのではなく、第一に十分な材料体験をさせることが重要である。この材料体験の量と質によって、その後の個々の表現活動の拡がりが変わってくると考える。

⑸ 教育方法⑤ ー 基礎的な知識・技能（表現を具現化する手立て）

教育方法の第５としては、苦手をつくらない第３の要素でもある自分らしい表現を目指させるためにも、道具の扱いや表現技法の基礎的な知識や技能が不可欠である。自分らしい表現を実現するためには、それを支える知識や技能が求められるからである。特に、絵画題材に関連してパレットや水入れなどの基本的な用具の扱い方や混色の仕方・筆のタッチなども、併行して扱う必要性を痛感している。今まで、それらの点について指導や教育された経験もない学生も少なくなかった。教育方法⑤は、基礎的な知識・技能である。

〇中学年題材 「絵の具を楽しもう」（水彩絵の具による多様な表現活動）

・**表現活動⑧**「３色であじさい多彩」絵の具の基本的な知識・技能を習得する表現活動として、赤・青・黄の三原色に白色をいれた４色で、多彩な紫陽花の花と葉を描くのである。

・**表現活動⑨**「オノマトペでいろいろ」次に、混色で様々な色を作りオノマトペに合わせて様々な筆のタッチで表現する。楽しい表現活動を通して基礎・基本の技能を身につけさせる。教育方法の第５は、個々の自由な表現を可能にする基礎的な知識・技能の習得である。

⑹ 教育方法⑥ ー 絵画題材による表現活動 （絵による表現の可能性体験）

教育方法の第６として、絵画題材による表現活動での取り組みがある。苦手意識をつくらない教育方法として、絵画題材からのアプローチは避けて通れないと考える。それは、学生たちが抱いている苦手意識の対象が、工作表現よりも圧倒的に絵画表現であるからである。絵画表現を通じて、苦手意識を少しでも減らし払拭させる必要があると考えた。

「物の形を正しく写すということはほとんど問題にされない。いかに画面に作者自身が、いきいきと個性的に表現されているか。ということが大切なのである。」[14)]

風景や人物をそのままうつすのであれば、デジタルカメラとプリンターがあれば容易に再現することが可能な世の中において、時間と労力をかけて人が絵に描くことの教育的な意義について理解してもらう必要がある。

かつては絵画表現として、うまさやテクニックなどに左右されない偶然性の表現であるモダンテクニックなども実際に取り入れてやってきた。しかしながら、活動中は夢中になって学生たちは取り組んでいるが、それが終わった後に苦手意識がなくなることはなく、残念ながら苦手意識の根本的な解決にはならないという結論に達している。そこで現在では、偶然にできるモダンテクニックではなく、表現対象を明確にした絵画題材研究を講義内容に取り入れている。講義の最初に、なぜ絵に表すのかという根本的な問いを学生達にする。そして、題材研究として「本当に描きたい絵」というテーマで取り組ませる。平

成30年度までは、「本当に描きたい風景」の題材で、絵画でも風景画に絞ってやってきたが、平成31年（令和元年）度については、風景題材に絞らずに広げて取り組んでみた。

「今一度美術教育の原点に戻って『何のために絵をかかせるのか？』という素朴な問いかけから『われわれは作品を作るために授業をしているのではない、子どもの心を豊かにするため、すばらしい感性や創造性を養うためにこそ表現活動があり、授業があるのだ』という当たり前の指導観に立つことによって、結果主義、作品主義を克服する必要がある。」[15)]

題材研究として、絵で表現することになるが、あくまでも作品作りが目的ではないことを毎回のように強調していく必要がある。教育方法として留意すべき重要事項でもある。

○　高学年題材「本当に描きたい絵」（作品作りでなく自分らしい表現への取り組み）

絵画題材において、最初から最後まで特に重視したのが、なぜその絵を描きたいと思ったのか、本人自身の抱くイメージやその思いである。プリントに記入し、画用紙の裏に貼らせる。毎回授業の最初にそれを一人一人確認してから表現に取りかからせることにした。重要な教育方法である。本当に描きたい絵のイメージや思いを大切にして、毎回それを確認しながら、試行錯誤して絵に表現していくのである。そこには、正解があるわけではないので、学生は苦労することになる。ここに表現活動の難しさと教育的な意義が存在すると考える。作品の中には、作者の表したい優しいイメージを苦労しながら表現したものがある。参考資料としていた実際の風景写真よりも印象に残る絵画表現になっていた。題材研究のまとめで行った鑑賞会の場面では、実際の写真とこの作品を比べながら両方示すことによって、絵の表現は写真の再現ではなく実際の写真よりも作者の思いが伝わるという素晴らしい側面があることを実例によって学生達に理解させることができた。

○　高学年題材　「目に見えないものを描く」（抽象表現への取り組み）

・表現活動⑪　ハイパースライドティッシュ法　（クレヨンのかすれ表現体験）

後期の講義では、前期に使用したクレヨンを使って目に見えないものを描くという表現活動を行った。ここでもすぐに題材に取り組むのではなく、クレヨンに慣れてもらうために、事前に表現活動⑪として、クレヨンによる重色表現やティッシュでこすることによってグラデーション表現になる「ハイパースライドティッシュ法」の学習経験を取り入れた。前期に体験したクレヨンによる様々の表現からさらに発展的な表現技法を習得することができた。

次に、クレヨンで「目に見えないものを描く」題材に取り組む。八つ切り大の画用紙に縦と横の曲線を引き４つの部分に分ける。最初に、左上の部分に「怒り」を色と線で表現する。次に右上の部分には「喜び」のイメージを描く。次の左下の部分には「悲しみ」のイメージで、人間の喜怒哀楽を表現する。最後の右下の部分には「自分自身」という目に見えないものを描く学習経験を体験することで、とかく目に見えるもの実際にあるものをそれらしく忠実に描くことを規範として認識していた学生の意識改革を促す貴重なきっかけになると考える。重要な教育内容と方法の１つと考える。

○　中学年題材「４倍になる絵」（自分らしい自由な表現への取り組み）

クレヨンでの様々な表現体験を受けて色と線での表現から自分自身の表現へと繋げるために、黒色両面カーボン紙を使った「４倍になる絵」の題材に取り組んだ。

導入では、Ｂ４普通紙を小さく畳んだ紙に、鉛筆で描くとそれが、あっという間に４倍の

絵になるという魔法のような工夫を取り入れた。興味関心を抱かせるための工夫である。

この工夫は、効果的で大学生でも夢中になって表現活動に入ることができた。今まで苦手意識を持っていた学生たちにも絵を描く抵抗も少なく楽しく取り組める教育方法の１つになった。４倍になった絵の着彩については、クレヨンだけではなく色鉛筆や色クーピー、カラーサインペンなど多様な画材も使用することができる。

⑺　教育方法⑦ － 認め合う学習の場（鑑賞）を設定（表現の相互理解）

教育方法の第７は、それぞれの表現を認め合える学習の場を意図的に設定することが必要であると考えた。その学習の場とは、表現途中の段階や最終段階の鑑賞学習場面などである。特に、図画工作・美術においては作品が完成したらそれが学習のゴールではなく、個々の表現をお互いに認め合える鑑賞学習が、教育上不可欠であると言える。

お互いに表現の良さや工夫について認め合い、それが、新しい発見や自分の表現へのヒントに繋がることになる。今まで、自分の表現に自信がなかった場合でも他者が認めることで、自分でも自覚しなかった良さに気づくことも十分ありえるのである。

ここで重要な教育方法の留意点としては、表面的に単なる作品を見合うだけの鑑賞時間にしないということである。苦手意識が生み出される大きな理由の１つであった「うまく上手な作品」を求める傾向や「友達と比べられる」ことが嫌であるという苦手意識がつくられる原因を完全に排除しないと、この鑑賞時間によって苦手意識がさらに増長されてしまう危険性を孕んでいるからである。

作品や途中段階での鑑賞時間で徹底すべき教育方法として、「うまく上手な作品探し」や「作品と作品とを比べる」ような作品の見方ではなく、一人一人の作品の作者の思いやイメージを認めて、それを表現するために作者はどのような工夫や努力が行われてきたのかを理解していくような認め合える学習の場にすることがとても大事なのである。

⑻　教育方法⑧ － 学習空間の質を重視し改善すること －

教育方法の第８は、⑦の認め合える鑑賞学習の場とも密接に関連する学習空間の質の問題がある。学習空間・学習環境作りも重要な教育方法の１つであると考えた。

> 「『環境が人をつくる』を再確認したのと同等レベルで『人が環境をつくる』という筋道も確認し、教育環境の整備は教師の不可避の課題であり、よい造形環境が整備されたとき、はじめてよい美術教育が具現化されることを指摘しておきたい。」[16)]

学生同士で一人一人のそれぞれの表現の良さや工夫を相互に認め合えるだけでなく、お互いに発想を促し合ったりするような想像力を高め合えるような学習空間が求められる。

これは、本研究における研究成果の中でも特に強調すべき事項にもなっている。

要素⑤のように、表現を認め合えるクラスの雰囲気や環境があってこそ、有意義な鑑賞活動ができると考える。

しかしながら、この学習空間を良くするといっても一朝一夕に容易にできるものではない。これには、日々の教育の営みの積み重ねによって少しづつ出来てくるものであり、教師自身の意識改革と共に学級経営の在り方とも密接に関連している重要事項と考える。

6　苦手意識をつくらせない実証研究の結果

本研究は、平成26年度からスタートし平成31年（平成元年）度まで実施してきたが、前年度の研究成果を次年度の大学講義の中に実際に取り入れて継続検証してきた。

同じように教育方法①から教育方法⑧までの研究成果を平成31年度（令和元年）度の小学校教員養成課程の必修講義に取り入れて検証した。平成31年４月当初の学生の苦手意識が、実際の実証研究によってどのくらい変容したのか、前期「図画工作の基礎」講義及び後期「教育実践（図画工作）講義終了時の１年後の令和２年２月の最終講義において、再度調査を実施してその変容を調査した。図４が、その最終的な調査結果グラフである。

苦手意識がかなり減ったと応えた学生は、７名で９％いた。少し減ったという学生は54名で67％だった。合わせると76％約８割弱の学生の苦手意識を減らすことができた。

この結果で興味深いのは、４月当初苦手意識があまりないと応えた学生も減ったという者が少なくなかったことである。変わらないという学生は18名の22％であった。この中には、もとから苦手意識はなかったので変わらないという学生も12名いるがどうしても友達と比較してしまい苦手は変わらないという学生もいた。ほんの数名ではあったが、この苦手意識が変わらないという学生がいることは無視できない重要課題として受け止めている。それだけ、苦手意識は根強く学生に染みこんでいることも明らかになった。

また、かなり苦手意識が増えたという学生は０名で１人もいなかったが、少し増えた学生は２名で２％いた。その理由には、「授業を受ける側ではなく、教師として授業をつくる責任を感じたから」「評価が難しそうだから」と書いている。

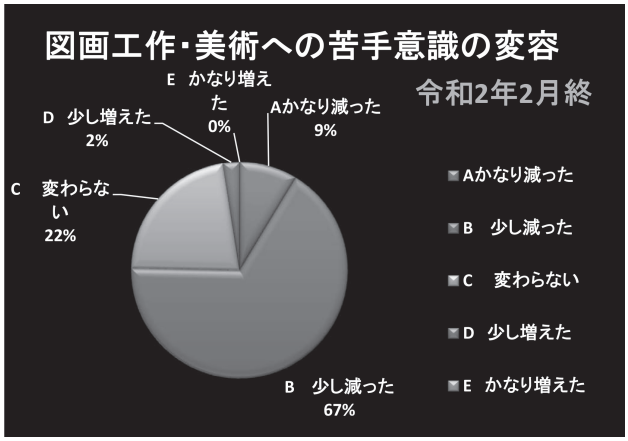

図４　１年後の苦手意識の変容

この最終調査では、その苦手意識が変化した理由についても、影響があった順に第１位から第５位まで５つあげさせている。

１番影響があったものから５P、４P、３P、２P、１Pとポイント化することで、影響度を数値化することができる。

１番影響があった理由は、合計195Pで「上手、下手で評価されないとわかったから」で、第１位の理由としてあげた学生は30名いた。２位でも９名いた。これは、苦手をつくらせない教育方法において重要な結果である。

２番目に影響があった理由は、合計127Pで「自由にできたから」であった。第１位の理由にあげた学生は13名、第２位は14名だった。これは学習空間の雰囲気や環境も含めて、一人一人が自由に表現に取り組めることが重要といえる。

３番目に影響があった理由は、合計112Pで「自分らしい表現が大切とわかったから」であった。第１位の理由にあげた学生は12名、第２位は13名だった。１番の理由とも合わせ

て、うまさではなく自分らしい個性のある表現を求めたことが影響していた。教育方法に反映すべき結果である。

４番目に影響があった理由は、合計108Pで「楽しく表現できたから」であった。これは、研究当初にはそれほど重要ではなく前提ともいえる常識と考えていたが、調査結果を見てあらためて造形美術表現に内包する根源的な魅力について再確認することになった。図工・美術への苦手をつくらせないためにも造形表現の楽しさについては、子供たちにも味合わせなければならないと強く確信することになった。

５番目に影響があった理由は、合計40Pで「鑑賞の時間にそれぞれの作品を見てその良さを知ることができたから」であった。これを理由に書いた学生はそれほど多くはないが、１位から５位までどこかに書かれていることは無視できない教育方法の１つとしてあげられるかもしれない。

この調査結果は、学生たちが自己分析して自身における苦手意識の変容について特に影響があったとあげた理由たちである。これは、教育方法として①から⑧まで講義の中で実証してきた教育的効果の結果としてとらえることができる。

この調査では、これから小学校教師になったら、児童に図工が好きになってもらい苦手意識をつくらせないためには、具体的にどうしたら良いと思うのかという質問もしている。

１番多かったのが、「上手下手ではないことを伝える」が31名であった。２番目に多かったのが、「一人一人の思いやアイディアを大切にすること」で30名書いている。３番目に多かったのが、「自由にさせること」で27名が書いている。他には、「過程を重視すること」が15名、「自分らしさを表現させること」も13名書いており、２番目の理由とも合わせて大事なことといえる。他には、「褒めてあげる」と書いた学生が18名いて、今回実際に題材研究をしながら教師や友人たちから褒めてもらったことが教育的に有効であったことを実感した結果になっていた。また、「比較しないこと」が11名で、「批判しないこと」も３名が書いており、今までの自分が受けてきた経験をも思い出しながら、今回の大学での講義経験から、小学校教師のあるべき姿を正直に述べていると感じた。

本研究の苦手意識をなくすための教育方法の検証が、教師を目指そうとしている学生にとっては教育を受ける側の子どもの視点から、教える教師という立場の視点で深く考えることができた機会になったともいえる。

7　おわりに　研究の成果と今後の課題

本研究の最終目標は、児童・生徒の子ども達に図画工作・美術の苦手意識をつくらせない教育の実現であった。しかしながら初期段階の実態調査結果から小学生や中学生よりも一番苦手意識を抱いていたのが小学校教員を目指す大学生だということがわかった。

そこで教員養成の立場から、教育において子ども達に図工・美術への苦手意識をつくらせないためには、最初に教師自身の苦手意識を払拭させる必要があったのである。

本研究の第１段階では、教員養成課程の講義を通じて苦手意識を生み出す原因を追求し、苦手意識をへらす具体的な教育方法を明らかにすることに取り組んできた。教員養成課程でも中学校・高等学校の美術教員養成の学生よりも小学校教員養成課程の学生の方が

はるかに図工・美術への苦手意識を抱いている現実があり、その教育方法が求められた。

そして研究を進める程に、図工・美術の苦手をなくす教育方法を探求することは、すなわち求めるべき図工・美術教育の実現に他ならないという結論に至ることになった。そして、この苦手意識の存在度合いは目指すべき図工・美術の教育との解離度を示すバロメータになっているのではないかと考えるに至った。

「この苦手意識の問題は、単に不得意感や表現能力の有無という個人的な問題というりも教育の在り方そのものの実態を示すバロメータとなっている。」[17)]

研究をスタートしてから、６年目にあたる平成31年（令和元年）度には、前期と後期の講義にて教育方法を検証し、１年後の段階においては約８割の学生の苦手意識を減少させることができた。残りの２割の学生の中には、元から苦手意識がなかったという学生がいるので、今回の教育方法の検証による研究成果はかなりあったといえる。しかしながら、数名の学生においては、図工・美術に対する苦手意識が骨の髄まで染みこんでいてなくすことができなかったという事実もあった。20年の間に積み重ねられた苦手意識は、容易には完全に払拭できないことも明らかになった。やはり、年齢の低い義務教育における発達段階において苦手意識の芽を作らない重要性も再確認することができた。

今後の課題としては、最終目的である児童・生徒の図画工作・美術への苦手意識をつくらせない教育の実現そのものであるが、令和２年度の大学講義においてもこの研究成果を生かしてさらに検証していくことを考えていたが、残念ながら新型コロナウィルスのせいで４月当初から対面授業ではなく完全にオンライン授業で講義を実施することになってしまった。今までの研究成果は、従来の対面授業を前提に得られてきたものであったので、オンライン授業では残念ながら全くその研究成果を直接生かすことができなかった。これからは教員養成課程においてもウィズコロナの新たな時代に突入することになる。

オンライン授業でも図工・美術への苦手意識をつくらせない新たな教員養成システムの研究・開発が早急に求められる。

なお本研究は、平成29年～平成31年（令和元年）度科学研究費補助金 基盤研究（C）「子ども達に苦手意識をつくらせない教育方法の研究・開発－図画工作・美術教育の質的改革－」（研究課題番号17K04738）の研究成果の一部である。

註、引用文献一覧

1）降籏　孝（2015）「図画工作・美術への意欲・苦手意識の実態と考察―児童・生徒・大学生の実態調査結果から―」山形大学紀要（教育科学）第16巻第２号にて、図画工作・美術に関する実態を把握するために実施した調査方法とその調査結果については、この論文によって詳しく述べている。
2）武田　忠（1995）「学習意欲を高める基本条件」『児童心理』金子書房、p.12
3）田上不二夫（2001）「『やる気』の心理」、『児童心理』、No.753、 p.9
4）平成28年度の最終講義にて、１年間の研究成果として苦手意識の変容に対する調査を行った学生にはその変容をもたらした理由について書かせているが、その中で苦手意識が少し増えたと応えた学生の理由の自由記述である。
5）降籏　孝（2016）「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素」、大学美術教育学会誌「美術教育学研究」第48号にて、苦手意識を減少させることができた原因と理由の考察から、苦手意識を減少させる５つの要素を明らかにしてきた。
6）Herbert Read（1972）“The Redemption of theRobot” H、リード、内藤史朗訳、「芸術教育における　人間回復」、明治図書、 p.18
7）Victor Lowenfeld（1956）”YOUR CHILD AND HIS ART”ローエンフェルド、勝見勝訳、「子どもの絵－両親と先生への手引－」、白揚社、p.199
8）香川　勇、長谷川望（1997）、「子どもの絵が訴えるものとその意味」、黎明書房、 p.180
9）霜田静志（1971）「児童画の心理と教育」、美育文化協会編『美術教育のすべて』、 造形社、 p.167
10）降籏　孝（2015）「図画工作科・美術科における教育コンテンツの研究Ⅰ - 造形美術教育をより良く するための第３の視点 - 」、大学美術教育学会誌美術教育学研究」第47号、p.324
11）鈎治　雄（1997）「教育環境としての教師－教師の認知・子どもの認知」、北大路書房、p.121
12）降籏　孝（2016）「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素」、大学美術教育学会誌「美術教育学研究」第48号
13）天野正輝（1998）「現代教育実践の探求」晃洋書房、pp.60－61
14）熊本高工（1950）「教師のための図画工作」、河出書房、p.59
15）花篤　實（1994）「美術教育の理念と創造」黎明書房、p.33
16）若元澄男（2011）「造形環境」、『図画工作・美術科　重要用語300の基礎知識』、明治図書
17）降籏　孝（2016）「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素」、大学美術教育学会誌「美術教育学研究」第48号、p.376

Summary

A Study of The Educational Methods
to Eliminate The Weak Awareness of Art
—Results of Practical Research in The Teacher Course—

FURIHATA Takashi

In the elementary school teacher training course, it was clarified from the results of the fact-finding survey that about 60% of the students were more or less weak in ART. Awareness of weakness is often neglected as one of the characteristics of individuals, but from the standpoint of teacher training, it also affects the education of teaching children to ART, and I thought that consciousness of weakness is an important issue that cannot be ignored.

The purpose of this research is to clarify a concrete educational method to eliminate the weakness in ART. From the analysis of the results of the fact-finding survey, I have investigated the causes of the weakness and clarified the factors that eliminate the weakness. Based on that factor, I have incorporated and verified attempts to reduce weaknesses as educational content in actual university lectures. By investigating before and after the lecture in 2019 and considering the transformation of the weak awareness of university students, I will eliminate the weak awareness of ART in the elementary school teacher course. Clarified an effective educational method.